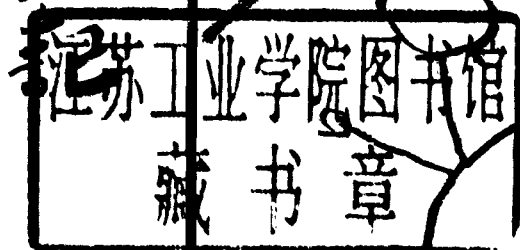


小島直記
伝記文学全集

仁記文學全集

第十一卷

島直紀



中央公論社

小島直記伝記文学全集

第十一卷

定価 三四〇〇円

昭和六十二年十一月十日印刷
昭和六十二年十一月二十日発行

著 者 小島直記

発行者 嶋中鵬二

印刷者 杉浦 博

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替 東京二一三四

©一九八七 検印廃止

ISBN4-12-402591-2

小島直記伝記文学全集 第十一卷 目次

松下幸之助

第一章 めぐりあわせ

第二章 ある距離感

第三章 松下政経塾

第四章 政経塾第八期生

石橋正二郎

序章 生涯のアウトライン

第一章 「パリに來ないかね？」——フランス里帰り展

第二章 違和感

結婚式 二十五周年記念式典

104 87 69

47 37 25 11

第三章 自伝『私の歩み』

「君は作家だから……」 「大実業家」の人生基盤

「亡妻のこと」の一章

第四章 パリの春

幻影 レセプション・リスト シェークスピア・
カントリー

第五章 ジョニ黒の思い出

「酒と囲碁」問答 「御念が入り過ぎはしないかね？」

山岡 孫吉

第一章 離郷者

第二章 魚釣り

第三章 初めての商売

第四章 自己嫌悪

第五章 伴侶

第六章 豊作の使者

205

第七章 ストライキ

213

第八章 デーゼルとの出会い

217

第九章 わしゃ社長やない

226

第十章 デーゼル記念石庭苑

244

岡野喜太郎

第一章 風の爪あと——師範学校生の危機感

253

第二章 戦い

269

共同社
抵抗
根方銀行
駿東実業銀行
駿河銀行

第三章 家長

303

三男六女
関東大震災
孫の薰陶

第四章 百寿翁

334

神奈川県知事

一千万円貯蓄提唱

駿河路

高碕達之助

第一章 伊豆堂ヶ島

第二章 電源開発初代総裁就任以前

第三章 初代総裁

第四章 政治家

第五章 その人柄

鮎川義介

第一章 エンジニア経営者の形成

エンジニアへの道 父弥八 铸件会社から日産コ
ンツェルンへ

第二章 関東軍の誘い

満鉄を売る話 総裁と社長 石原莞爾と松岡洋右

第三章 姿なき経営者

星野直樹 二枚の付箋 河本大作 満鉄と満業
「内面指導」

第四章 外資導入

ターニング・ポイント 国際金融ブローカーの暗躍
ウイリアム・O・イングリス 大豆とアメリカ
グルー大使のメモランダム 落日

第五章 悲 運

独房 「中政連」の光と影

あとがき

小島直記伝記文学全集

第十一卷

創業者列伝

松下幸之助

第一章 めぐりあわせ

昭和六十二年七月十六日、宮田義二氏、上甲晃氏じようこうが愛鷹山麓あしたかの山小屋に来訪された。数年前、宮田氏が鉄鋼労連委員長時代、講演会の控室で順番を待つ講師同士として、あいさつしたことがある。

そういうことは何度もあるが、ほかの人には感じられない「味」を宮田氏から感じた。労働運動の日本的リーダーである。あるいは、相手を圧迫してくるような勢いのいい、苦手のタイプかもしれないと思っていた。

その予感是完全に違っていた。少しも気負ったり、威張るところのない謙虚さの裏に、何ともいえぬ和やかな、温かい人間性を感じたのである。鉄火場、修羅場を何度もくぐってきて、なおかつ、血生臭さや荒々しさや、すさんだ雰囲気などみじんも感じさせない。このゆったりとした風格は、現代の時めく人からはなかなか感じられないものであるだけに、私の受けた好ましい印象は、忘れられないものであった。その上、碁が好きだということ、なお一層親しみが増したのである。この気持ちには、碁好きであればよくわかってもらえるであろう。

今は亡き友人伊藤肇君は、

「人間、好きか嫌いかだけだよ」

とスバツと割り切っていたが、まさに伊藤流の「好きなタイプ」に会ったという思いが強く、「ぜひ対局しましょう」

といった別れたのである。

しかし、お互いにジャンルの違う多忙のためもあって、それは実現しないまま今日に至った。

それがその日に実現したのは、松下政経塾「総括」上甲晃氏が宮田氏を案内してくださったからであり、この三人の間に、政経塾を軸とした人間的つながりができたからであった。宮田氏は、松下政経塾の副塾長である。私は、松下政経塾でこのところ講義を始めることになっておった。

宮田氏は囲碁六段の腕前。私の歯が立つはずはなかったが、いわゆる敗北感の悔しさというものを感じなかったのは、つまり、高段者の芸で、下手いじめの嫌な手などは一切使われず、正々堂々と打ち回されて、負けて気分が爽快になるのであった。そこに、碁のテクニクを超えた人間的「厚み」が出てくるのに違いなかったのである。

一方、上甲氏の人柄ということも強く意識させられた。碁を打たれる上甲氏は、我々のそばで本を読みながら、数時間の対局が終わるのを静かに待っておられた。時々、我々に声をかけてくださる。それは、「私のことは決してお気遣いなく」と、対局者の立場にウェイトを置いて、その気分を考え、待たされる自分の所在なさなどを抑えた気配りであって、そこによく練れた人柄がにじみ出ていた。

このような成り行きは、数年前、対局を約束した時点では全く予想もしないことであった。しかし、人間的予測を超えた成り行きこそ、人知でははかり知ることのできぬ運命のめぐり合わせというものであろう。

そういうことが、どういうわけか、このごろ幾つか重なって、「松下幸之助」という偉大な経

営者の世界に一步一步と引き寄せられ、単なる傍観者から、その事業の一端に強くコミットした立場が形成されていく。人生にはこうしたことがあるのかという思いが強いのである。

旧友小石幸雄君に出会ったことも、そのことに結びつく。

静岡県三島市郊外、愛鷹山麓に仕事場を移してから三年、いつの間にか出不精になって、東京にもめったに出なくなつた。

一昨年、たまたま上京したときに、数寄屋橋の角で声をかけてくれたのが小石君である。

彼とは大学で知り合った。旧制難波高校出身の彼と、旧制福岡高校出身の私とは、普通ならば親密になることはないのだが、軍事教練などでアイウエオ順に並ぶと、同じ「コ」の二人は、隣同士ということになった。

ただそれだけでなく、彼は文学好き、特に俳句に打ち込んでおり、私もまた文学青年、将来は作家を夢見ている。それまで関心がなかった飯田蛇笏の存在を教えられ、『雲母』という雑誌のあることを知って、それを手にすることもあるようになった。このことが、親愛感の根底をつくったのである。

彼は、某電気機器会社の重役になっているが、道の向こうから、懐かしそうに笑いながら私の名を呼んでくれた。そこで、喫茶店でしばらく話したが、そのとき、思いがけなくも松下幸之助氏のうわさが出たのである。

小石氏の父上が亡くなられたとき、松下氏は、友人として実に手厚い弔意を示された。そして、三年たっても、今なお少しも変わらぬ丁寧な心遣いを受けていて、遺族としては全く恐縮、感激しているというのである。

松下氏の人柄を語るエピソードというべきであるが、その話を聞いた時期が、たまたま別の事実と重なり合った。だれも作爲しない全くの偶然が積み重なって、それが身近に松下氏を考える一つの契機となっているのに気づいて、私もそのままほうっておけない気がしてきたのである。その別の事実とは、山下俊彦氏との出会いにはかならない。

『新潮45+』という雑誌が創刊されたのは、昭和五十七年四月だが、私は、思いがけない編集部のご好意で、その創刊五月号からまる三年間、いろいろのお方と対局し、その後、「四十五歳という年齢をどう考えられるか」を聞き、さらに、そのお方の「好きな言葉」を聞いて記事にするという幸いに恵まれた。これは後に『君子の交わり 紳士の嗜み』という単行本にしてもらっている。

その企画の中で、昭和五十九年十一月、山下俊彦氏と初めて会い、対局するチャンスに恵まれたのである。

その七年前の二月、当時松下電器産業の役員で、序列では、二十六人中、二十五番目の平取締役であった山下氏が、一躍「社長」に抜擢はつてきされたことは、いわゆる「山下跳び」として、当時のマスコミの話題となった。私はその名前を知ったのはこのときだが、ただ知ったという段階にすぎなかったのである。

評論家伊藤肇君が亡くなったのは昭和五十四年である。その翌年に一周忌のパーティーがあり、それが終わった後、葬儀委員長であった中山素平氏が、世話人一同を料亭で慰労されたことがある。そのとき私は偶然にも、山下氏と瀬島龍三氏との中間に座った。瀬島氏には、かつて伊藤君の紹介でお会いしたことがある。山下氏は初めてであった。